

＜特別支援＞

交流学級における障がいによる困難の改善・克服を目指した取組を通して、自分に合った方法を見つけ、挑戦できる自立活動

～児童理解を大切に、個別の教育支援計画を効果的に活用した自立活動の長期的な指導を通して～

大垣市立興文小学校 教諭 佐藤 正人

概 要

特別支援学級に在籍する子どもたちが将来「未知への問題」と遭遇し、解決をしていくためには、自分の障がいによる困難の改善・克服を目指した取組を通して、自分に合った方法を見つけ挑戦していく必要がある。また、近年は障害のある子どもと障害のない子どもが可能な限り同じ場で共に学ぶインクルーシブな社会の実現が求められている。そのためには、障害のある子どもの自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導が必要である。そこで、児童が自らの障がいによる困難の改善・克服をできるよう、児童理解を大切に、**個別の教育支援計画**を効果的に活用して自立活動を長期的に指導した。また、月の目標振り返りカード、自立活動での取組の足跡の掲示、交流クラスの担任との連携などをし、すべての児童が納得して主体的に追究できるように促した。本実践を通して、交流学級で、できることが増えた喜びを感じ、障がいによる困難さに対して、自分に合った方法を見つけ、挑戦できる児童の姿を生み出すことができた。

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

近年、特別支援教育への理解の広がり、障害の概念の変化や多様化など、特別支援教育をめぐる社会や環境の変化に伴い、特別支援教育を必要とする子どもたちの数は増加している。文部科学省からも小中高学校における特別支援教育を必要とする児童生徒の増加や障害のある子どもと障害のない子どもが可能な限り同じ場で共に学ぶための環境等の整備をはじめ、よりインクルーシブな社会の実現に向けて関連政策が等の一層の充実を図ることが求められている。また、障害のある子どもの自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、多様で柔軟な仕組みを整備していくことも重要であると示されている。

しかしながら、こうした状況について学校現場では理解はされていても、どのように適切な指導をしたり、児童に必要な支援をしてよいか困っていたりしている教員が増加しているのが現状であり、それと同じように困り感を感じている児童も増加している。

(2) 児童の実態と願う姿

本校の特別支援学級（自閉症・情緒障がい）（以下「自・情」と記述）には4人が在籍している。これまでに、自立活動の授業で自分の得意なこと・不得意なことを図鑑にまとめて、自己理解や他者理解を深めてきた。また、「なかよくなろうすごろく」では、問題をみんなで協力して解くことや

意見を出し合いながら、個々のソーシャルスキルを高めながら楽しく活動してきた。その結果、困難なことがあっても、身に付けたソーシャルスキルを使って解決したり、休み時間に積極的に仲間を誘って遊んだりする姿が増えてきた。

一方で、交流学級では、人間関係がうまく築けていないことや、慣れない環境から起こる心理的な面や交流クラスでの成功体験の少なさなどから不安が強くなり、自・情学級で身に付けた話し方や関わり方等のスキルを上手く活用できない面がみられる。

そこで、「障がいによる困難の改善・克服を目指した取り組みを通して、自分に合った方法を見つけ、挑戦できる自立活動」を行っていくことで、学校生活の中で起こる自分自身の課題を自己理解し、それらを改善・克服するために進んで自分に合った方法を見つけ、繰り返し挑戦していけると考えた。そこで願う児童の姿を次のように考えた。

自立活動を通して、自分の合った方法を活かして楽しく交流学級の学習や生活に参加できる児童

(3) 研究課題について

このような実態から、障がいによる困難の改善・克服を目指した取組を通して、自分に合った方法を見つけ、挑戦できる自立活動を研究することを考えた。また、自・情学級を対象にしたこの実践を通常学級の児童や担任に活かしていくことで、本校の研究主題である「自ら学び向かい 納得解を生み出す児童の育成～課題意識を持ち続けて追究する子をめざして～」に向かう学ぶ集団をつくっていくことができるのではと考えた。以上の

ことから、研究主題を「交流学級における障がいによる困難の改善・克服を目指した取組を通して、自分に合った方法を見つけ、挑戦できる自立活動」と設定した。

2 研究仮説

本研究では、以下のように仮説を立てた。

障がいによる困難の改善・克服を目指した取組を通して、自分に合った方法を見つけ、挑戦できる自立活動を仕組むことをすれば、自己肯定感をもち、落ち着いて、楽しく学校生活を送ることができるのではないかと仮説を立てた。

3 研究内容について

研究内容を具現するために以下のように研究内容を設定した。

〈研究内容 1〉

課題意識が連続する単元構想図の工夫・改善

- (1) 児童と担任の関係作りからなる児童理解と分析
- (2) 児童理解をもとにした個別の教育支援計画の作成
- (3) 個別の教育支援計画をもとに一年間を見据えた自立活動の計画
- (4) スモールステップの活動

〈研究内容 2〉

自ら学びに向かい、納得できるまでの思考・判断・表現する力を育成するための指導方法の工夫・改善

- (1) 自己の生活を振り返ることができる導入の工夫
- (2) よりよい考えや表現を創り出すための工夫・改善
- (3) 学びを振り返り、さらなる学びの意欲をもつための工夫

〈研究内容 3〉

個に応じて納得する力を育てるための評価

- (1) 交流学級の担任と連携を図る

4 研究実践

(1) 対象児童

本学級には、2年生 A、3年生 B、4年生 C、6年生 D の 4 人が在籍している。A から D は以下の点で学校生活の中で困り感がある。

2 年生 A

- ・人や状況によって自分の行動を注意されたときに、素直に聞き入れないことがある。
- ・自分の思いが先行しがちで相手の気持ちを考えたり、場面状況を捉えたりすること苦手である。

3 年生 B

- ・双方の会話、やりとりをするのが苦手である。
- ・一斉・複数の指示理解は難しく、聞き逃しがある。

4 年生 C

- ・人の意見を受け入れたり、集団で活動したりすることが苦手である。
- ・公共の場で、自分の思ったことを話したり、行動したりして、周囲から誤解されやすい。

6 年生 D

- ・自分から仲間に話しかけたり、集団に入ったりすることは難しい。
- ・慣れない人に対して自分の思いや考えを伝えることが難しい

〈研究内容 1 に関わって〉

課題意識が連続する単元構想図の工夫・改善

(1) 児童と担任の関係作りからなる児童理解と分析

まず、研究に限らず自分が学級経営で大事にしていることは、児童理解と分析である。そこで以下のことを取り組んだ。

「日常生活での児童との関わり方」の実践

- ・毎日、児童一人一人と一対一で会話をする時間を設け、本人が自由に話したいことを聞く対話活動を継続する。
- ・児童の発言や行動に対して、受け入れることに徹する。
- ・休み時間に一緒に遊んだり、交流学級で遊んでいる姿を見守ったりするなど、児童に着くことを心がける。

これらのことを取り組むことによって少しずつ児童との関係にも変化が見られ、児童理解と分析にもつながった。

特に、表情や態度の変化が見られたのは、次の 2 人である。2 年生 A、6 年生 D は、今年から自・情に入級した。4 月当初は、初めての男性の担任や慣れない環境で不安もあり、聞かれたことに対して小さい声で「はい」と返事を返す姿や学級のルールに慣れることに精一杯で自分らしさを出せない姿が多く見られた。しかし、児童と担任との交流の場を意図的に設け、児童理解と分析をしていくことで児童の表情が明るくなり、態度も本来の自分らしさの姿が多く見られるようになった。

(2) 児童理解をもとにした個別の教育支援計画の作成

次に、児童理解をもとにした個別の教育支援計画の作成するために以下のことを取り組んだ。

「個別の教育支援計画を作成するときに留意した」実践

- ・児童と担任とで一年間でがんばりたい・できるようにしたい目標を話し合って決めた。

〈児童の交流での目標〉

- 1位 友達を増やして、遊んだり、話しをしたりして仲良くなりたい。
 - 2位 みんなとうまく学習したり、生活をしたりしたい。(通常に戻りたい)
 - 3位 友達から褒められたい、認められたい
- ・保護者の児童への願いと家庭での様子などを聞いた。そして、そのことをもとに自立活動の内容で児童のどの部分を重点的に指導するかを保護者と話し合った。

〈保護者の願い〉

- 1位 楽しく学校で生活をしてほしい。
 - 2位 困った時に自分の気持ちを話せるようになってほしい。
 - 3位 できれば通常学級にもどって、みんなとがんばってほしい。
- ・学校生活での成功体験だけでなく失敗体験も含め、それがどのように状況で起こったのかを考えた。
 - ・懇談の際に児童の様子と保護者からの願いをもとに作成した個別の教育支援計画の合意形成をした。
 - ・担任が児童理解するための一つの手段として「自分図鑑」を児童に作成させた。

このような取組をして個別の支援計画を作成したことは、保護者も児童も担任も同じ方向で指導できるので有効であった。

(3) 個別の教育支援計画をもとに一年間を見据えた自立活動の計画

4月当初に比べ、5月頃になると自・情学級の環境にも慣れ、児童同士の関係も「自分図鑑」を通して自分のことを紹介したり、学級遊びをしたりしてお互いを理解できるようになってきた。また、授業での環境でも、視覚的刺激を軽減らすために、していた「ついたて」を無くしても落ち着いて学習できる集団になってきた。そのような実態から、自・情学級の中で自分に合った生活をするための自立活動から交流学級という場で障がいによる困難の改善・克服を目指した取組を通して、自分に合った方法を見つけ、挑戦できる自立活動を計画することを考えた。これは、先ほど述べた保護者や児童の願いに合意する。そして、私が自・情学級を担任するときの児童の最大の目標は「自分を知る」と「我慢(自我のコントロール)」だと考える。それらを踏まえ以下の自立活動の計画を作成した。

「自立活動を作成するときに留意した」実践

- ・本来、自立活動は最初から集団で指導することを十分留意するものだが、児童の実態から集団の学習形態にした。
- ・自立活動の内容は、個々の児童生徒に、そのすべてを指導するべきものではないので、六つの区分の下に示された27項目の中から必要とする項目を選定した上で、それらを相互に関連づけることを意識して自立活動の計画を作成した。
- ・自立活動で身に付けた個々のソーシャルスキルがいつでも交流授業や学級の仲間と関わる時に実践できるような自立活動の単元の学習内容を設定した。
- ・児童が一年間でがんばりたい・できるようにしたい目標を達成できるように、ゴールを3月に設定し、長期的な自立活動の年間指導計画の作成をした。

これが作成した自立活動の年間指導計画とそれに関わる主な学校・学年の行事である。

4月	「自分図鑑」
5月	「なかよくなろうすごろく」
6月	「なかよくなろうすごろく」
7月	「自分図鑑」中間
9月	「楽しく交流にこにこレベルアップ大作戦」
10月	「楽しく交流にこにこレベルアップ大作戦」
11月	「楽しく交流にこにこレベルアップ大作戦」
12月	「楽しく交流にこにこレベルアップ大作戦」
1月	「えんぴつやさん」
2月	「いざ金華山みんなで無事にゴールできるかな」
3月	「自分図鑑」まとめ

【図表1 自立活動年間指導計画】

4月	始業式・交流授業・学級遊び・委員会・クラブ
5月	1年生となかよくなる会・フレンドリー・スポーツテスト
6月	宿泊研修(5年)
10月	運動会・修学旅行(6年)
11月	社会見学(1年から5年)
12月	ひびきあい集会
1月	書き初め会
2月	6年生のがんばりに感謝する会
3月	卒業式

【図表2 自立活動に関わる学校・学年の行事】

この年間指導計画に基づいて自立活動を取り組んで、有効であった点が、次の三点である。

- ・自立活動の活動をする際に、児童がなぜこのような活動しなくてはならないのかという意識になることなく納得して意欲的に取り組めた。
- ・児童のゴールを長期的に捉え、自立活動をすることで、個々の発達段階に応じて児童生徒のペースに合わせて行うことができた。
- ・児童の一年間でがんばりたい・できるようにしたい目標が明確になっているため交流授業や行

事など参加した時に児童自身が何を頑張ればよいかを理解していること。また、教師が交流学級の担任に児童の頑張っている目標を伝えることで、児童に対してどのように対応したり、褒めたりすることを共有して指導に当てることができた。

（４） スモールステップの活動

児童自身が一年間でがんばりたい・できるようになりたい目標を設定した後にしたことは、以下の５点である。

- ・今の交流学級での実態の把握と教師からのアドバイスをする。
- ・目標を達成するために、交流学級の実態から自分ができることを決定していく。
- ・自分ができることを自己決定して交流学級で挑戦して難しいと感じたら、自分のできることを変更して挑戦してもよいこと。また、ステップ１に挑戦してときにステップ２ができてよいとする。
- ・交流学級の実態から自分ができることを自己決定したことを自・情学級でも意識してできるように見届けとできたときに褒める。
- ・目標が達成できたかが分かる毎月の取組表を作成し、振り返りをする。

「４年生Ｃスモールステップ」の実践

４年生Ｃの一年間でがんばりたい・できるようになりたい目標である

友達をいっぱいいつくって遊んだり、話をしたりすること

この上記の目標達成するために今の交流授業での自分の実態にあてはまるものに○をつけてもらった。

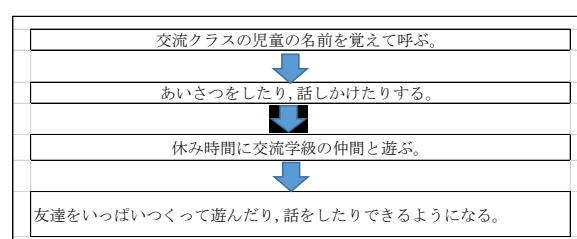
①	発表したり、反応したりしている。
②	仲間や先生の話聞いている
③	困った時に助けを求めることができる。
④	気になることがあっても我慢できる。
⑤	休み時間に交流学級の仲間と遊んでいる。
⑥	交流クラスの児童の名前が言える。
⑦	自分のできることは頑張っている。
⑧	失敗したときに素直に謝ることができる。
⑨	必要な持ち物を準備できる。
⑩	授業中に立ち歩いたり、寝転んだりしない。
⑪	あいさつをしたり話しかけたりできる。

【図表３ 実態調査アンケート】

自分が交流授業でできている番号は、⑧と⑩と

答えた。児童自身は○があまりついていないことに自信がなさそうであったが、私は○の数の多さよりも自分がつけた○の項目が目標を達成するためにとっても役立つことを伝えた。⑧は友達と関わる中で失敗したときには素直にあやまることは大事である。⑩は仲間が、頑張っている時に迷惑をかけないようにしている行動は素晴らしいと価値付けた。このような伝え方をする事で児童自身もマイナスに捉えることなく頑張ろうとする姿が見られた。

次に行ったことは、項目の中で自分の目標を達成するためにはどれならできそうかを相談し、スモールステップで進めていった。４年生Ｃのできそうな順番の思考図は以下である。



【図表４ ４年生Ｃが始めに考えた思考図】

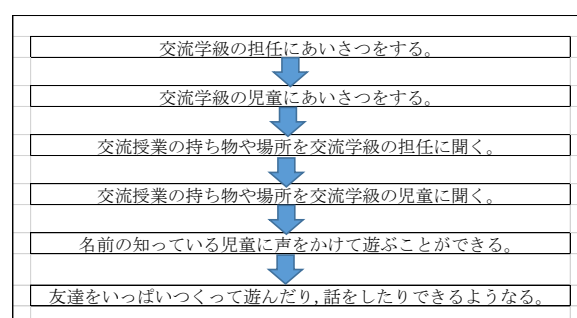
この思考図の取組の「交流クラスの児童の名前を覚えて呼ぶ」を交流授業での目標に１ヶ月挑戦した。

結果は、ほとんど名前を覚えて呼ぶことはできなかった。要因として２つ挙げられる。

一つ目は、本人が顔と名前を認識するのが苦手であること。

二つ目は、名前を覚えている児童がいても話すことがないと名前を呼ぶことができないこと

このことから、次の交流学級でのできそうな順番の思考図の変更と内容を細分化したものは以下の通りである。



【図表５ ４年生Ｃが再思考した思考図】

結果は、前回の月よりできる日にちが増え、７月・９月と月が過ぎていくごとにＣ児のできる段階が上がってきた。１２月の現在は、交流学級と遊ぶことが楽しく、遊んで帰ってきたときには、「明日も遊ぶ約束してきた」「疲れたけど楽しかった」と話す場面が増えてきた。また、交流授業の必要

な物や場所なども自分から聞きに行ける姿が増えてきた。その他の児童も同じようにスモールステップで積み上げていくことで児童の様子も次のように変化が見られた。

- ・交流授業に参加する態度や発言の内容が前向きになった。
- ・目標を設定して上手く行かなくてもやり直して頑張ればよいことに気付き、以前よりも粘り強く取り組めるようになった。
- ・自分の意見を相手に伝えたり、自己決定したりする姿が増えてきた。

このような成果から、児童と話し合いスモールステップで積み上げて行くことはとても有効であった。

〈研究内容2に関わって〉

自ら学びに向かい、納得できるまでの思考・判断・表現する力を育成するための指導方法の工夫・改善

(1) 自己の生活を振り返りができる導入の工夫

今年度の自立活動は、交流学級での日常の学習や生活で課題となったことを改善したり、振り返ったりして、スキルを身に付けるようにすることである。そこで、自己の生活を振り返りができる導入の工夫として以下に取り組んだ。

「自立活動の物的環境」の実践

いつでも、児童の自立活動での取組が分かる足跡を教室の背面に掲示した。



【写真1 自立活動での取組の足跡の掲示】

教室の背面に掲示してあることで、自己を思い出すことが苦手な児童にも視覚化しているので振り返るのにとても有効であった。そのため、活動が継続していくほど比較できる足跡が残るため、振り返りの話す内容が焦点化して話せるようになってきた。

「楽しく交流にここをレベルアップ大作」の実例」

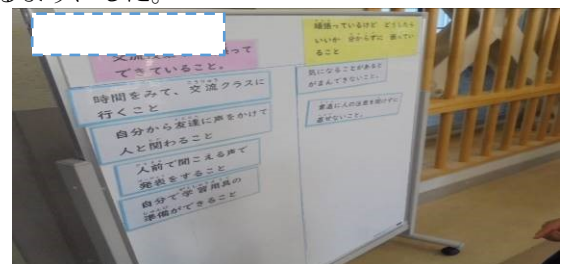
ICT 機器を使った教師の寸劇ビデオや交流クラスの児童からのビデオメッセージの導入

ICT は児童にとっても興味を示し、理解しやすい。そこで、児童が交流学級で同じ状況になる場面を交流クラスの担任が演じた寸劇ビデオを導入で視聴することでさらに興味を示した。また、客観的にビデオを視聴できることで、自分事として

ではなく、劇に出ている人の対処の仕方の課題点やアドバイスとして適切に話すことにもつながったことから、この方法はとても有効であった。

(2) よりよい考えや表現を創り出すための工夫・改善

これまでの実践から、交流学級での参加の仕方の様子や困っていることを、自・情学級の仲間と意見交流し、仲間から自分の願いを達成するためのアドバイスをもらって、考えたことを繰り返し実践することを通して、自分に合ったよりよい方法を見つけ、交流学級の仲間と関係を深めていくことが必要だと考えた。そこで、授業の中で、「自己選択」「自己決定」「自己評価」「他者評価」をできる場を位置付け、自分でさらによりよい表現（方法を）をやってみたいと願いを明確にもてるようにした。



【写真2 交流授業での頑張りをフローチャートで整理】

頭では理解していてもなかなか行動にうつせない自己課題について、仲間からのアドバイスを受け入れる場を位置付けることで、自分の固定概念である「こんな時には ○○すべき」というものではなく、「こんな時にはこんな考え方もあるよね」と柔軟に仲間の考えを受け入れることで、よりよい考えをもつことができことから有効であった。

(3) 学びを振り返り、さらなる学びの意欲をもつための工夫

児童の実態から、よりよい考えをもつことができたとしても、それを「やってみたい」と思うことは難しいと考えた。そこでこのような手立てをした。

- ・仲間からのアドバイスを受けた後に困っている場を想定して練習する場を位置付けた。そうすることで、よりイメージしやすく様々な場面での自己課題に対して前向きに考えられるようにした。
- ・本時の児童の具体的な対応について実践している姿を教師が価値付けた。
- ・今までの交流授業で頑張ってきた姿をビデオで視聴した。

これらは、自己肯定感を高め、交流学級への参加意欲につなげる手立てとして有効であった。

〈研究内容3に関わって〉

個に応じた納得する力を育てるための評価

(1) 交流学級の担任との連携

今回の自立活動の学習を活かす場は交流学級なので、交流学級の担任との連携がとても大切である。そこで交流学級の担任と以下の連携を図った。

「交流学級の担任と連携した留意」の実践

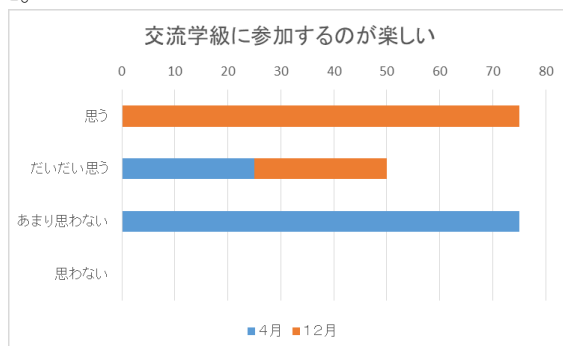
- ・児童の交流クラスで頑張る目標を伝え、その目標が達成していたのかを評価してもらうこと。
- ・交流クラスの担任から、なぜその評価になったのかを聞き、その理由や頑張っていたことを児童に伝えること。
- ・交流クラスの担任としての児童に対しての願いや思いを聞くこと。
- ・交流クラスの担任に児童の特性や効果的な支援や対応の仕方について説明すること。
- ・事前に交流授業の学習内容を聞いて、児童に見通しもたせたり、自・情学級で練習や準備をしたりして不安を減らすこと。

このように交流学級の担任と連携することで、少しずつ児童・交流学級の担任・交流学級の児童の様子に変化が見られるようになった。

児童は、交流学級の担任や児童との関わりを意欲的にもち、ポジティブな発言や行動が増えてきた。また、交流学級の担任もその児童に合った支援を考えて実行をしてくれたり、交流の児童も積極的に関わってくれたりするなど今までより受け入れ方が変化してきた。

5 成果と課題

本年度担任する自・情学級の児童4名に対して4月と12月のとったアンケートの結果を比較した。



【図表6 交流学級に参加するのが楽しい】

4月に「交流授業に参加するのは楽しい」の質問に対して、「だいたい思う」25%「あまり思わない」が75%の結果であった。自立活動の取組をして12月にもう一度同じアンケートをとった。

「思う」とした答えた児童は75%増加し「だいたい思う」と合わせると100%に達した。また、「あまり思わない」と答えた人が0%ということから自立活動を通して交流学級における課題を少しずつ改善していることを実感することができた

と考える。

成果

- 児童理解をもとにした個別的教育支援計画を活用することで、児童の障がいによる困難を明確にし、段階的な指導のための有効な手立てになった。
- 長期的に自立活動を行うことで、個々の発達段階に応じて児童生徒のペースに合わせて行うことで主体的に自分に合った方法を見つけ挑戦する姿を生み出すことができた。
- 教師が意図的に授業の中で、「自己選択」「自己決定」「自己評価」「他者評価」をできる場を位置付けることで、自分でさらによりよい表現（方法を）をやってみたいという意欲につながることができた。
- 教師が児童の頑張りを価値付けることで自己肯定感を高め、交流学級への参加意欲につなげることができた。
- 交流学級の担任と連携を図ることで、児童の障がいによる困難さを複数の教師で共通理解をし、支援をすることで児童が困難さを改善できたと実感することにつながった。

課題

- 自立活動の指導における交流学級における障がいによる困難の改善・克服について一定の成果を見出せたため、さらなる工夫改善につなげていく。
- 担任の交代や毎年環境が変わるため、継続して児童が取り組むのが困難であり、引き継ぐことが難しい。
- 交流学級の担任に負担がかかる面もある。

6 参考文献

- ・文部科学省 「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説（平成30年3月）自立活動編」
- ・文部科学省 令和4年度 特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について（通知）
- ・独立行政法人国立特別支援教育研究所「特別支援学級での自閉症のある子どもの自立活動」
ジアース教育新社
<講評>